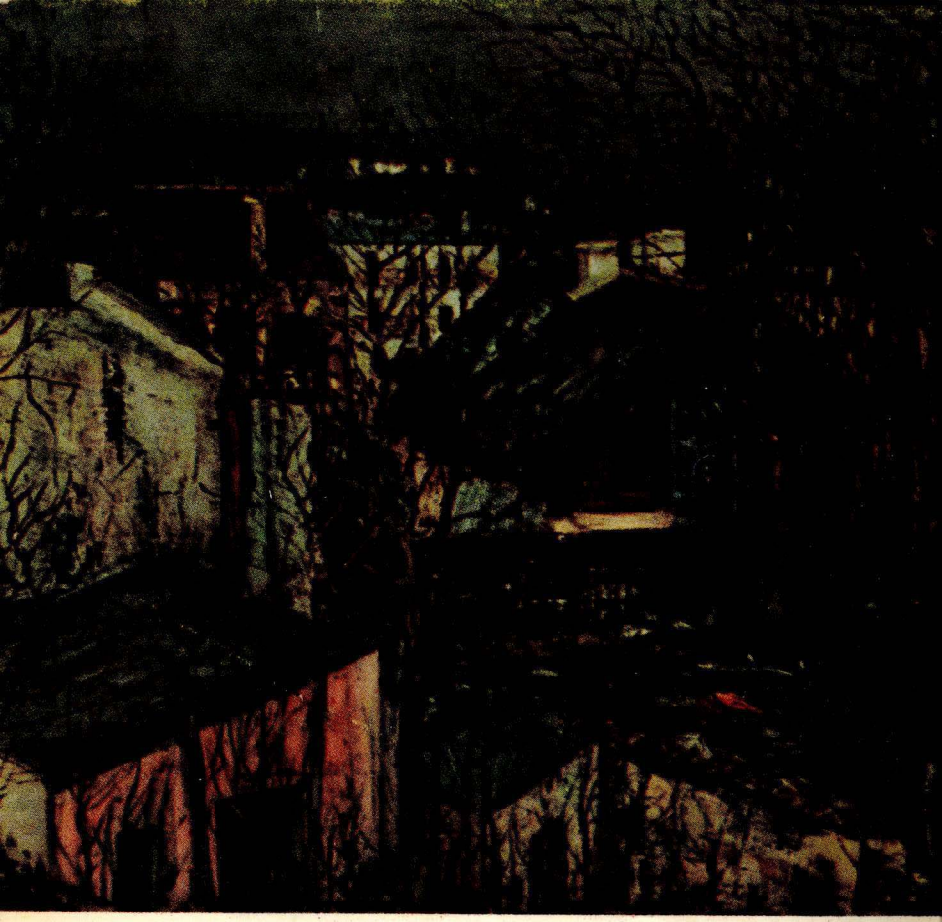

Jules Romains

Les Hommes de Bonne Volonté

三笠版

現代世界文學全集

3

ジュウル・ロマン

善意の人々

Ⅱ

川崎竹一譯

三笠書房

三笠版
現代世界文學全集
3
善意の人々 I

昭和二十九年六月二十日印刷
昭和二十九年六月二十五日發行

定價 參百五拾圓
地方賣價 參百六拾圓

譯者 川崎竹一
刊行者 竹内富子
東京都千代田區神田神保町二

刊行所 三笠書房
東京都千代田區神田神保町二ノ二〇
電話九段(33)六五〇四番
七四八三番
振替口座東京二二〇九六番

落丁、亂丁のものはお求めの書店又は本社でお取替致します。

株式會社 堀内印刷所
Printed in Japan

目次

善意の人々

幼き戀

一　學校の屋根の上で……九
二　靑春――勞働――詩……二四
三　群衆とその指導者……四〇
四　パリつ子の幼い日、エレーヌ・シゴオの出現……四三
五　キネット、思い出をゆりうごかす……六三
六　夜の儀式……七七
七　ゼルファニオンがベルナルチィヌ孃と話しをする……八三
八　現代娘……九七
九　叔母と姪――一つの觀念の發生……一〇三
一〇　伯爵夫人とマニキュア女……一〇五
一一　サン・パプウル家の親睦晩餐會……一一三
一二　夜の八時、サン・ゼルマン大通、そのほか……一二四

一三　シャンスネ家、表面と眞實の狀況……一三三
一四　華やかな晩餐……一三九
一五　食後の會話……一四三
一六　謎の友情……一五一
一七　曉のあらし……一六七
一八　大批評家……一七六
一九　ジャレとゼルファニオンの大散歩――エレーヌ・シゴオの最初の失踪……一九〇
二〇　マリー夫人とザンメコオとの最初のあいびき……二〇一
二一　キネットが助力を申し出る……二〇四
二二　ジョーレス訪問……二〇八
二三　レオミュール通りのざわめき。エレーヌ・シゴオふたたび姿を消す……二二

パリのエロス

一　フェートの廣場……二四三
二　新しい職業についたワゼンム……二四六
三　エドモン・マイユコタンの心配……二四九
四　一〇九三年のアヴェルカンの企劃……二五二
五　兄と妹……二六五
六　赤い牛肉のひときれ……二六八
七　アマンジェ通りの人通り……二七一

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook

八　犬のマケールの散歩と心配　二九三
九　ドイツの革命家　三〇〇
一〇　ロウレルクの思想――秘密結社（フランマソンヌリー）　三〇八
一一　リコボニのたくらみ　三一三
一二　ザンメコオの男子寮とリコボニの小さな事務所　三一八
一三　肖像　三四〇
一四　愛情の季節　三四三
一五　放浪者　三四五
一六　社會政策研究會の夕　三六三
一七　ジュリエットが手紙を受け取る　三七五
一八　幸運の歌　三八一
一九　キネット悟る　三八九
二〇　ジャレとジュリエットの再會　三九七
二一　テルトル廣場での食事　四〇四
二二　クロオズリイのつどい――モレアスの理念　四一一
二三　フォイアチェ通りの集會――ジョオレスの幻想　四二六
著者より讀者へ　四三一

善意の人々 II

幼き戀

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook

一　學校の屋根の上で

「ここのところを通つて行こうよ、これがいちばんいい道かどうか知らないがね。でも道は道なんだよ」

「首の骨を折りはしないね？」

「いや。カイマン鰐の記憶にかけてもだね、首の骨を折つたやつは、いままで一人もいないよ。たしかに神樣の護りがあるんだ。がんらい、師範學校の者には、僕のように臆病で不器用な奴が多いときているので、さつぱりサーカスにむかないんだよ。いつか僕は君に、ヴォルテールやヴィクトル・ユーゴオなんかの神（キリストでない東洋異端の神）を信じているといつたね？　だから、窓がきつくしまつていて開かれないんだ。（聖書の「たたけよさらば開かれん」に對するしゃれ）僕は完全な異神論派（ディイスト）だ。ツァラ（ニーチェの超人ツァラトゥストラをいう、學校の頭株のこと）の眼から見ればもつともあわれむべき人間さ。僕は、すぐそのへんに、がつちり、鍵でしまつている屋根裏部屋を一つ見當つけてあるんだ。鍋公（學生隱語ナベ公。經理の何でもたくしこむ主任の惡口）のやつが、そこに古典の藏書を積んでいるんだよ。窓からだつたら苦もなくはいれるはずなんだがね。それを一つ僕は研究してやろう」

「ねえ君」とゼルファニオンがいいかけた。「文法家の君にして……」

「僕がかね？」

そういつて、コオレは短いマントの裾前を大げさにひろげて、抗議するようなゼスチュアをしてみせた。

「だつて君……」

「つまらぬ臆測にかからないでくれたまえ。僕が文法を選んだのはだね。そもそも文法の教員免狀を取るのはいちばん樂だからなんだよ。もしA・B・C（アルファベ）の免狀というものがあつたら、僕はきつとA・B・C（アルファベ）の教員免狀の方を選擇したんだがね」

「つまりね、君が文法家である以上、君は學生の隱語で、鍋公というのに、二つの意味があるのをなんとも思つていないのかね？」

「いやア。そいつには三つも意味があるんだぜ。そうさ。とくに、ある食事のことをいうのだ、普通には食物のことさ。それからまた、まかないの經理のことをいうんだ。なぜかというとね。まかないというやつに、あやしげなやりくりをいろいろやつている中でも、食べ物を監視している

からなんだ」
「君はこの用語の貧弱さに、あいそがつきないのかね？」
「いや全くだ。支那にはねえ、同じような單一の綴り字で、夕星の心とか、十七ヵ國を流れる大河とか、租税取立人とか、若い娘の第一に守るべき道德だとかを、いいあらわす言葉があるらしいんだ。しかも三千年來つづいている言葉なんだ。この雨樋はほんとうにひろいじゃないか。言つておくがね。僕はもう、昨日通つてみたんだ。そこをまた通るんだから、危險なんかじつさいありつこないよ。僕は祖先傳來危い橋をわたるのは大嫌いなんだよ」
「君の短いマントが邪魔にならないかね？」
「うん。おい君？　これはまるで逆立ちみたいな輕業だろう！　おい！　君の手を貸してくれ。少しひつぱつてやるから。僕はここの破風につかまる。僕がマントを着ているのは、屋根の上が寒いからだよ。僕は風邪をひきやすいんでね。おお、貧しき者たちを亡ぼさんとて、多ぞ來れりか。いや、君、竈かなくつてもいいよ。僕のいま作ろうとしている現代詩の一句をちよつといつてみただけだよ。そいつはエレディア（ジョゼ・マリア・エレディア。象徴派詩人）の詩を三、四句まねしてね。《ふるさとのみたまやの上を、かけりゆく鷹の如くに》それから《血醒きローマ皇帝》で終る利き文句も中に入るんだ。こいつは、あらゆる人生の場面の中に充分あてはまると僕は認めているんだ。僕たちはいま、この屋根裏の部屋から《かけりゆく鷹の如くに》やつて來たじやないかね？　全くぴつたりだよ。それから、あそこにいるシードルの奴も、屋根の頂上に十一月の夕燒け空に向つて立つているが、もし何かにたとえる必要が感じられるとしたら、血醒きローマ皇帝とやれる。こいつは何にでも、ぴつたりあてはまるぜ」
　コオレは用心して雨樋の溝の中を進んで行つた。二、三歩ごとに、彼の左の方に屋根裏部屋の出張つたところがあつた。彼はそれをたくみに利用して安定を保つた。一つの屋根裏部屋から次のところまでうつるのには、少し時間がかかるような氣がした。彼の短いマントのなかで、兩方の手が、振子のようにこつそり動いていた。
「ちつとも怖くなんかないだろう？」
　ゼルファニオンは村で屋根の上に登つたり、はだしで斷崖のふちの羚羊の通る道をつき切つたりして、遊んだことがあるので、パリの屋根の雨樋の溝には、ほんのちよつとものけぞしただけだつた。それにまた、學校の屋根は、危險よりもむしろ壯大さを感じさせた。屋上でみると、パリの全景が眼前に現われるまえに、まず學校の四邊形の建築物が堂々とした威容を感じさせ、彼の眼をおどろかすのだつた。彼は雨樋の中に兩脚をつつこんだまま、屋根裏部屋のつづいている趣きのある配列や、たくさんの煙突の釣り合いの美などを歡賞することができた。遙か下には、木立

の深い學校の中の、かなり壯麗な中庭が眺められた。そこには、幅のうすい綠地帶をめぐらした圓形の噴水池があつた。歩道では思いもよらない風が、しだいに二人のわきの下を吹きぬけてゆくのだつた。町の通りの裏を吹く風と、市街の上空を支配している風とのあいだには、風の强度にそれほどの違いはなかつたが、前後左右から風が身體をとりかこんで、できるだけ身近に身體を締めつけてくるような感じの點が違つていた。

けれども、けわしい勾配がいたるところについていて、ちよつと見ても、無禮な奴だといわんばかりに、そこを歩いてゆく人間を押しかえそうとして威壓するかのような屋根屋根も、內密の構造さえわかつたら、散歩にあつらえむきに拵えられているように思われた。建物の角の雨樋のはしから、鐵板よりももつと厚味のある金屬でできた、すかしになつた小さな段々が屋根の勾配の上にこつそり掛つているのが目についた。そこを登りさえすれば屋根の頂上に出られるのだつた。頂上は、建物の長さいつぱいの、幅一尺ほどの平たい臺になつて、縱縞の形についた細い棧がその上にとび出していた。氣が晴ればれするが、しかし冒險的なこの道は、激流にのぞんだ山の小徑のように、人の心に高見に立つて感じるような一種のスリルとたのしみとを起させた。が、身體を樂にしたポーズをとることや思いきつて動くことは拒否される。ちよつとみたところは危險はない。技倆を必要とする點も、そこには何一つないのだ。ただ、もし一歩を誤つたら、という考えが、別個に嚴然として存在していた。脅迫感は少しも無かつたとしても、絶壁と奈落とがたえずそこにつきまとつていた。それはちようど或る地方にいる、旅人をつけてくる癈り狼のようで、こつちを攻擊しては來ないけれども、馬が一歩でもつまずくのを待つているといつたようなものだ。全身の筋肉を緊張させて、しつかり騎つて、手綱を引きしめていなければならなかつた。ここは弱い者や老人や神經のたかぶる女性などの近よれる所ではないのだ。このひとめぐりは、聖母寺の二つの塔の間の渡り板の上でめまいを覺えて顫え上つた、パスカル先生のような哲學者にもまた、すすめかねるかもしれない。つまり、ここは、不敵さと若さのためにとつてある舞臺だ。野心的な夢想のためにもまた、すばらしい散歩場だといえた。

「ヴァルダ錠（咽喉鎖靜脈。それを創製した人の名をつけてある）は要らないかね」とコレがいつた。「咽喉の痛みを豫防するのは必要だよ。ヴァルダというのは樫のやどり木から液汁を抽出した、白衣の祈禱尼僧を想豫させるね。或いは、ロシア人の、さらに正確にいうと、モルド・ヴァラキア人の女の學生を思わせるんだ。ときに、君にあらかじめ注意しておくけれどねえ、ソルボンヌ大學の校內で、ヴァラキア人の女の學生に目をくれちやいけないよ。彼女たちは結婚の相手を物色して、

群(グループ)をなしてフランスに入りこんでいるんだ。かけりゆく鷹の如くに、だよ。彼女たちはソルボンヌの學生というだけで滿悅するんだ。それだけでもすでに彼女らには大好きな肉の餌(えさ)なんだからね。しかし師範科の學生だったら、なおさらぜいたくな獲物だと思っているんだよ。僕みたいに氣のきいた奴は危險は無いがね。でも、君みたいな純眞な部類は……彼女たちのえじきになるんだ。フランスの家庭こそ災難というものさ。もし君がここを通り拔けるのに足がふるえるようだったら、煙突につかまりたまえ。この鋏劑の爽快さは何ともいえないほど恍惚とするねえ。人間が阿片マニアになるのも、きっとこんなふうなんだな。僕はもう何年も甘草の鋏劑がひどく好きだったんだ。恐しいことだね。朝から晩まで僕は甘草をなめて、唾液を出して、げっぷをしていたんだよ。僕の胃袋は歩道を修繕するアスファルトに使う原料の大釜みたいになっていたんだからね。君はパリの文明というものに本當に通じていないだろう。いまではリオン人も歩道にタールを使うことを發見しているかしら？　僕はまだ、知っちゃいないんだと思うね。ところで君の故郷の、ピュイーアンーヴレイ（ヴレイの古都オート・ロアール縣）もどんなところだか、僕にはわかるような氣がするね。廣い鋪裝道路。通りの眞中に小流れがある。消燈時間後にはおつかなびつくりのへっぴり腰で人間が歩くのさ……ほうれ、あの塔が見えるかい？」

「うむ」

「サン・ジャックの塔だ」

「あ、そうかい？」

「いや。ちがうんだ。あんまり君が馬鹿正直なんで、うっかりからかえもしないね。あいつは、アンリ四世中學の塔だよ。僕の出た學校だよ。僕はあの塔の蔭で三年暮したんだ。ところで僕はまだその蔭から出ちゃいないんだもの、いやになっちゃう。サン・ジャックの塔はあのあたりだ。もっとずっと遠いがね。むしろ、その位置は、あのパンテオンの殿堂のうしろの、へこんだ場所にあるはずだ。ここから見ると、パンテオンは實に壯大だね！　僕たちが押潰されそうな感じだ。あれに聖心寺(サクレ・クール)も隱されて、ビュットの高臺（モンマルトル界隈の小丘）も見えないんだ。譚もそんなにかかっていないのにね。それに聖心寺は眞白いお寺なんだがね！」

「あのすぐそばに見える圓い塔は何かしら？」

「あれこそ、血醒き皇帝(インペラトール・サングラン)ナポレオンが眠っている傷兵(アンヴァリッド)保護院だよ。いやいや。ねえ君、君をそうおだてちゃ相濟まんな。あんまり君は、苦もなくひっかかるんだからねえ。あいつは軍醫學校(ヴァル・ド・グラース)の建物さ。僕はローマを見たことはないが、そのすべてがひどくローマ風に見えるね。パンテオンよりも軍醫學校の方が特にそうだね。僕はさっぱり美的感覺がないんだよ。だけど、僕を感動させるものがある。僕は美術目錄の本しか讀まないし、それも餘り讀みはしな

いがね、何かのおりに寫眞凸版のついた古い本をめくつたが、一枚の寫眞に、あのような圓塔がのつていたんだ。まだ他にも大きな廣場をとり卷いて、建築物が列んでいて、人ひとり歩いている姿もなく、或いはほんの目に入らないほど小さく、一人の坊さんの姿がついていたんだ。それがどういうわけで寂莫とした壯大な風景として、僕の眼に映るのか僕は知らないがね。僕はロマンチックな懷舊の情を求める傾向なんかもたないんだけど、實際、その寫眞にのつているような町に住んで、何かの仕事に就いて暮していたらどんなにいいだろうと思つたね。僕は聖職者の位階に上つて、神の恩寵をうけて修道士の座にでもつく男にできているらしいね。(七十八歳までいい。それからころりと死んだつてね)太鼓腹をさすつて、勝手なお經をあげているうちに、飯の時間が來てみんながまつている、てなことを考えたりしてねえ……」

「それに給仕女のことも……」

「それはもちろんさ。それに、尼さんの懺悔僧のこともだぜ。僕はもとからひどく內氣なんだよ。だから色慾のたのしみも互いに或る種の秘密尊重の條件の下にしか考えられないんだ。それは絶對安心ということなんだ。じつに美しい空じやないか。ねえ、どうだい。この紅の夕映は! 植物園に行くと君に教えてやるがね。ちようどあのとおり眞紅なお尻をしたお猿がいるんだ。だが、お猿のお尻はもつと、ぱつとした赤さだね。そいつは僕が保證するぜ。もつと色あいに不鮮明さがないんだよ」

ゼルファニオンは、困惑と熱心な興味との混合した氣持で地平線のほうを眺めていた。高い所からパリを眺めたのは彼にはこれが最初だつた。いままでジャレが彼を避けさせていたのだ。(眺めたつて、まだ君にはよくわからないかもしれないよ。光線の作用にだつて君はびつくりしてしまうよ、パリ見物はあとのことにしたまえ。君には暇があるんだから)そういつてゼルファニオンが行きたがつていたモンマルトルの丘の散歩さえ、二人は他の日に延ばしていた。

しかし、この學校の屋根は、パリを見下せるほどの快的さはなかつた。やつとパリの水準に立つているようなもので、船の底からあがつて來たくらいの程度で、ぐるり一面に、海面が見えるだけなのだ。風の敷布をちようど水平にみている感じだつた。

赤色の靄が、だんだん遠くに濃くなつていた。パリが横腹につらなつて氾濫していた。いろいろな建物や間近なその壯大な威容さえも大景觀のように大きく映つて來なかつた。むしろ航海者が觀測するのに困難な視界のようだともいえた。まわりに、波の起伏がありすぎて、その波浪のくる源を見きわめるのに、必要なほど遠くへ眼を放とうとしても、それができないようなものだつた。ゼルファニオン

は一度も海を眺めたことがなかつたけれども、海員になつたような氣分を覺えていた。彼が乘り出している狹い傾斜は、大波に搖られている船の中にでもいるような想像を起させた。船乘りの行く道だ。しかし、もう落つこちる權利もないといつた船乘りの、すらすら歩けないような道だつた。

「君、降りるかい？」とコオレがいつた。「僕は寒くなつてきたんだ」

「そう？　僕はもう少し居たいんだがなァ」

「だつて、君は戻つてこられるかね？」

「う、うん」

「もしも君が首の根を折つたとしたら、君。僕は後悔するからね」

「いままで誰も落つこちた者がいないと君はいつたじやないか」

「それじやいい。僕が安全に渡つてしまうまで、君はちよつとでも動いちやいけないぜ。君の落つこちる音で僕がぐらぐらとなるかもしれないからね。あとで慘劇のことを人から聞かされるほうが僕は助かる。そいつはまんざら面白くないこともないからね。だけど、その場に居合わせるというのはぞつとするからね」

コオレはすこしまえかがみになりながら遠ざかつて行つた。彼はのろのろ歩いて行つた。もはや兩腕で拍子をとつていなかつた。右手で顎鬚を撫でていた。そのようすはちようど、夢想にひたつて、歩道の端をぼんやり歩いている通行人のようだつた。

ゼルファニオンは煙突の煉瓦に背中を寄せた。パンテオンを背後にしていた。前方に軍醫學校の建物が見え、はるか遠くの方に、球の形をした、男のまんまるい性器に似た建物があつた。それは天文臺の圓い塔だつたけれども、彼は知らなかつたのだ。

《ああ、偉大だ！　俺はこの偉大さに陶醉してしまつた。コオレは變な氣取り屋だが、それほど輕侮すべき男でもないね。俺は寮にくすぶつている勉强虫どもよりもあの男が好きだ。あいつらは實直な勤め人階級だよ。人間の精神的な著述の陳列棚にすぎないよ。パンダル（ギリシヤの抒情詩人紀元前五二一―）やルクレチウス（ローマの叙事詩人紀元前九五―五一）のことだつて、ただお題目のように學んで、まるで一足の靴みたいに、型を覺えているだけだよ。こういう奴らの先祖というのが、第二帝國（ナポレオン三世）に忠誠を誓つた連中なんだ。精神の迫力というものがないんだ！　かわいそうにね！　あいつらは修辭學級で、大ユーゴオ、あの海原の彼方をうたつた壯大なユーゴオをさえ、惡口いうような連中なんだ。この空は實にユーゴオの詩にうつてつけの空だね。ガアネシア（英領の島）の海紅（かが）き十一月だ。ここ十年の中に俺はどうなるだろう？　失敗の人生はまつぴらだよ。ジャレと初めていつしよに散歩

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook